

下里

～農業と戦争～

話し手 新井 太一郎さん

聞き手 子安 千央

中村 友弥

(埼玉県立松山高校映像制作部)

1 下里の農業

私が農業を手伝い始めたのは、5歳くらいのときだったかねえ。

下里は野菜はあんまり作ってないんじゃないかな。お米を作ってるところが多いと思うよ。前は私は蚕もやっていたけどねえ。

農業は一年かけてやっていくんだ。春は苗代でいって、箱にもみを振ってな、芽を出させるやつを作ってるんだ。そして夏はな、田転がしていうのをやっているよ。それで草を刈るんだ。今は大きい機械を使ってるんだけどね。秋は収穫だね。でもそれだけじゃないんだよ。収穫したところに麦をまくんだよ。二毛作って言ってね、昔は米をとって麦をまいてって二回やっていたからねえ。冬は麦踏をしたり、他には俵を作ったりしたよ。その俵は60キログラムもあるからね、おぼさんなんかはひもを使ってしょっていたよ。今の人がだったら腰やっちゃうよ。

そして、麦を収穫するのはだいたい6月とか7月あたりだよ。

2 下里と戦争

戦争が起こっていたときは、私は駅の近くの本屋のあたりにあった軍事工場で働かされていたよ。だから戦場に行っていない。でも、私たちの一つ上の人たちは戦場に行き、最前線に立たされていたよ。そういう人たちはほとんど戻ってこれなかったねえ。

軍事工場では、飛行機の部品なんかを作らされていてな。働いていたのはだいたい今でいう中学2、3年生の人たちかなあ。昔は小学6年生の次が高等1年、2年…だったけどね。長い間働かされたからね、いくら慣れて工具の名前とかも覚えていたよ。

食べ物なんて全然なかったから大変だった。サツマイモのジャガイモのしか食われねえんだもの。しかも、それらを友達やら兄弟たちと分け合って食べたからな。

3 コラム～下里の採石～

下里では採石をやっている。しかし、良い石はあまりとることができず、クズと呼ばれる悪い石ばかり採れてしまい、それを積み上げることによって、でかいボタ山が出来てしまうらしい。



割石青石採石跡地

(取材日 平成 26 年 7 月 30 日)

新井太一郎さん

昭和6年の1月16日生まれ。8人兄弟の長男である。

4 取材を終えての感想

新井さんから話を聞くことができ、自分にとってとてもいい経験になりました。新井さんがよく言っていた「昔の人は、お米を食べればうんと働く、今の人は遊んでばかりで駄目だ」という言葉を聞いて、怠けてばかりではだめだと、改めて反省しました。

こういったことが聞ける機会はとても少ないので、この機会を設けてくれたことを本当にありがたいと思います。この経験を生かして、下里について深く調べていくことができたらいいなと思っています。

今と昔の生活 -戦争が影響した生活-

話し手 安藤隆夫

聞き手 原口貴幸【埼玉県立松山高等学校一年】

佐藤悠馬【埼玉県立松山高等学校二年】

小さい頃はよく手伝わされたな

畑仕事は、早くにおふくろに死なれちゃったから、小学校5年のころからほとんどやってたよ。そんで朝5時くらいから田んぼへ行かなきゃだから、それよりも早く起こされたもんだ。

田植えとか、まして昔は今と違ってトラクターとかないからさ、牛を引っぱって。子供だって角をついてれば牛にもげやしねえから手伝った。それで一人じゃ出来ねえから子供使うほかない。

それで戦争が始まったぐらいから、農繁期って言って畑の手伝いをするように、いくらか学校が休みになったんだよ。

そりゃあ確かに条件の良い家は子供が動かなくても平気だけど、そういう家はあるわけねんだよな。

昔は肥料なんてあんま無かったから、牛とか馬のフンを使ってた。朝飯前に草刈りに行ってきて牛や馬にくれんだよ。んで食い残りや糞がたい肥になるんだよ。だからものぐさしてる暇ねんだよな。ほんで牛小屋は、今ならきちとしてあるから出られる心配はねえけど、昔は掘立小屋みてえのだからな、牛に出られちゃって大騒ぎしたもんだよ。

戦争時の学校生活

学校に行くときは弁当を神社に隠してた。学校に弁当を持ってくと休み時間に外に遊びに行くと戻ると弁当はねえんだから。町の方の子が食べちゃってんだよ。確かに町の方の子は食べ物が無いかんね。こっちで百姓やってるのは芋とかあったからね。だから学校にはカバンだけでもってった。そうすればやつらに食われることはない。

あと、小菅空港と日光空港があつてよ、そこに半日交代ぐらいで働きに行ったよ。だけど、子供だから、何も出来やしなからね、荷物運びとかだった。

東京行けば仕事がある

俺さ、ずっと東京で働いてたんだよ。んで岩手から来た人は親が米を送ってきたんだよ。車で紙袋に30キロ入ったのを二つ積んでな。でも、会社にくれば社宅あるけど、米つつうもんはどこへ行っても必要なものだから。

家から出たことない子だから、修学旅行以外に親から離れたことねえがね。ほんで仕事すると汚れるから洗濯するけど、地下のボイラー室の洗濯するところは良いものだけ洗濯するようになってん。それ知らねえわけだよ。自分で洗濯したことねんだから。それで汚れたやつを洗濯機に入れとくだけなんだから。家ならそれで済むんだけど。んで朝「着がえろ」って言うのと「ありません」って言うんだから。ほんで「みな汚れちゃったので洗濯機にあります」って言うんだから。だから洗濯機の使い方まで教えるようだったよ。そういう子がいたんだ。作業着はきちっとしなきゃダメだった。会社のメンツにかかわるからね。だから作業着にもうるさかった。地方の仕事が多かったけど上下白でコックみたいに綺麗にしてねえと入れてもらえなかったよ。

【取材日 平成26年7月30日】

プロフィール

安藤隆夫 あんどうたかお

昭和6年9月1日生・83歳・農業

小学五年の時に母親を亡くし農業の仕事を手伝っていた。22、3歳ぐらいまで石堀の仕事をしていて少しすると東京に行って仕事をしてた。今は自宅で農業をしている。

～取材を終えての感想～

今回取材をしてみて、今とは比較にならないぐらい大変な時代だということがわかった。

変わりゆく環境 -子どもからの生活-

話し手 島田 旭

聞き手 橋本 慎也 内田 拓弥

(埼玉県立松山高等学校映像制作部)

子供のころの環境

生まれたのはここだね。下里の自宅です。家族は5人で、息子は1人です。

子供のころは、よく山に入ってたよ。山には動物がいたね。山兔がいたよ。首にひっかかるように罟を張って取ったよ。それでね、この兔を当時は食べたんだよね。昔は農家の内じゃ買うと高くてね。今みたいに肉のレシピについて詳しく知らなかったから煮るくらいしかなかった。うどんや何かに特別に入れた。

今とちがって昔の飯は米の飯と麦の飯を食べるのが普通。毎日、麦と白米を交ぜて。米は金にしなくちゃならないか。麦を使ってうどんなんかも食べたね。

小川町には槻川って川があるでしょ。川に入って魚を取ったよ。今と違って川がもつときれいだったからね。ドジョウやフナがたくさんいたよ。

おこずかいはお祭りの時に1銭か2銭、親がくれてね。ここらへんにね、今のスーパーの100分の1も無いような小さい店があったんだ。そこで飴玉を買って食べていたね。

戦争の体験

僕は戦争で兵として出兵したんだよ。通信兵ってやつでね。電信とかモールスとかをやった。軍隊入ってすぐ、モールスを習ったんだよ。通信教育隊ってのが専門であって、これがまいったね。何しろ頭でモールスを覚えなきゃならないからね。神経をとがらせる仕事だよ。幾人か神経衰弱になってたよ。

今の中国の「瀋陽」とか「ハルビン」、南朝鮮の「大田(てじょん)」で終戦だった。1年半で中国の半分くらい回っちゃった。あと朝鮮も半分くらい。でもおっかないってことは無かったなあ。瀋陽にいた時は「東方大学」の物置で、「ハルビン」では、「牡丹江(ぼたんこう)」行って、山の中で仮小屋を作って、朝鮮では日本人学校で寝泊まりしていたね。

通信兵の朝は早くてね。朝6時起床だったかな。夜の点呼は9時で。でも、その時間より早く起きて勉強しなくちゃだし。夜遅くに偉い兵隊にいじめられて、ビンタされたこともありましたよ。

戦争が終わって、22歳で家に帰ってきたとき家族全員いたよ。あの時のことはよく覚えるよ。10月の20日だけ夜一人でポコポコ小川の駅から歩いてきたんだから。

移り行く農業

家は昔から農業をやっているんだ。俺が生まれる前からね。昔は今と違って道路がアスファルトじゃなかった。耕地整理する前は小さい細かい道がたくさんあった。機械が使われるようになったのは耕地整理の後からだね。機械を使う前は「万能」や「唐鎌」っていう畑を掘る道具を使っていたね。後は手作業だね。牛や馬の力を借りたりすることもあった。夏は稲を育てて冬は大豆を育てた。稲は一家庭100平方メートルくらい360~400*。2*獲れた。家によってちがうのですよ。良い泥と悪い泥があるからね。

子供のころから良く親の手伝いをしてたよ。兄弟がいたから子守りとかね。夏の暑い日は団扇で扇いだり、冬の寒い日は半纏を使っておぶったり。親の農業のやり方を見ていただけなのに、自然に覚えていたね。



唐鎌の説明をしている島田旭さん

(取材日 平成26年7月30日)

PROFILE

島田 旭 しまだ あきら

大正12年11月2日生・91歳

下里の自宅生まれ。五人家族。兄弟の長男。

●取材を終えての感想●

島田旭さんはとても優しい人でした。質問に対して昔のことを思い出しながら一つ一つ丁寧に答えてくれました。おかげで、今と昔の変化の違いがはっきりわかりました。

インタビューなんて初めてしました。とても良い経験になりました。この経験を生かしてスムーズにインタビュー出来るようになりたいです。

小川のハンター

話し手 島田 正治

聞き手 鎌田 拓海

田村 悠

(松山高校映像制作部 1年・2年)

介護の経験

前にね、やっぱインタビューされたことがあるんだけど。それは、介護。俺、寝たきりの重度障害者の介護を15年くらいしてた。

そういう仕事も自分の仕事以外に勤めてたの。

その人たちが書道をしたって言ったん。15人くらい生徒がいてね、じゃあ書道教室をやろうってなって、書道教室もやって。

でも、県の関係施設だから時々職員が来るわけですよ。そうすると、施設に入ってる方の作品を先生方とか職員が貼るわけですよ。すると、県の人 came 時に見て「あれ、これだれが教えてるんですか?」とか聞くんですよ。立派な先生だと嫌になっちゃうと思うんですよ。だって書けないから。1番ひどい子はどうやって書いたと思う? ヘッドだよ。ヘルメットにヘッドギアつけてワープロ打つでしょ?それと同じ感じでそこに筆を付けて書くんですよ。

最初のうちは半紙が真っ黒だよ。その子が、誰が見ても間違いなく字だと思う字を初めて書いたんだよ。それを両親が見たときはすごい喜んでたね。それは教えてよかったと思ったよね。うまい下手っていうのは別でね、今まで出来なかったことがね、ほんのわずかな教育の場として出来たっていうの、すごい感謝してるよね。

狩りを始めようと思ったのは

若いとき銃で遊びたいって思ったんだよ。私が27歳だから26歳のころから40年近くやって、当初はヤマドリとかが豊富だったんだよ。秩父に行ったりもしたし、秩父なんかは朝3時半ごろに出かけたりしてね。日の出とともに山に登ってそうやって遊んで。でも、若いころだけだよ、自分も積極的に動けたし。でもね、やっぱり銃なんかを扱うと厳しい。警察が個別調査、裏調査なんかじゃないけど回るのよ。その人だって証明する。それが苦しかった。とにかく、ハンティングをしたかった。あとね、犬作りもしたかった。それで試験を受けたら受かってしましましてね。それで始めたってのがキッカケ。

実際の狩りはね

ただ、遊べればいい。でも、ましてや銃。飛び道具。それを扱うにはマナーが必要。マナー=ルールだと思うんだけど、それが一番のネックだよ。仲間たちにもそれだけは守ってほしいと思う。実際に、複数人で山に入ると、どうしても2、3人の隊列になる。で、山に登って重たいから銃を担ぐ。そうすると後ろの人の目の前に銃口がむく。だからそれは肩にかけるとか、引き金に指を触れないとかで、危ないことは絶対にしない。まあ今はハンターの数も減って仲間もやめて、狩りに行くときは自分1人。全国で50万人いたハンターも今では20万人。

最近ね。イノシシ・鹿の被害が多い。この間、新聞にも環境省が夜も出るようにしようとか、警備会社に受託してみたいな記事もありましたし、先日の新聞の記事で長野県で梅の木が老木になって若い木に植え替えて、若い芽が鹿に食べられるなんてのがあって、全国的に鹿狩りが盛んなんですよ。1都5県の環境省とその地域の責任者の会議があって出席した。やっぱり1都5県の県境に鹿が集まるらしいんだよ。発情期に、そこにある新芽や樹皮を食べちゃう。そうすると植物は生きる生命力を失う。それを防ぐためにハンターの力を借りたいっていうんだけど、ハンターも数が少なくてみんな

老いてきてて、平均年齢が65くらい。みんな高齢者なんだよ。そんな人たちが県境の山なんか行けないじゃん。そういう面で四苦八苦してるね。

なんでイノシシが人の里に下りてくるのか。最終的には人間のせい。最近インタビューされると「私は悪いことは何もしてない」みたいに怒って帰っちゃう人いるよね。でも、実際悪いことはしてるわけなんだよ。乱開発とともに山が荒れちゃってる。山が荒れれば食べ物も少なくなる。食べ物がないから求めて降りてくる。求めて降りてきたら作物がある。だけど人はそれを食べられたくない。その繰り返しなんだよ。だから、俺も罠の免許なんかとって小川町にも11基の大きな箱穴が置いてある。でも県の許可証が2か月に1回発行される。その都度お金がかかる。メインのところに置いてるから出沒は抑えられてるけど、彼らだって生きる権利があるんだよ。

一番完璧だったのは

60kgくらいのイノシシをね、50mくらいの距離で撃ったの。1発撃ったら動かなくなったなあ。でももう1発。同じところに入ったね。完璧に心臓にいったね。ここに入れば必ず大丈夫だって。でね、うまくいったときなんてのは反動が肩に返ってくるんですよ。「うお!当たった!」って感じのね。だから山で1番怖いのはやっぱり事故なんだよね。1発で仕留められなかったり、仲間の弾が当たったり。最近、ハンター目指してる人が2人いるんだけど、やっぱりマナー。そこだけは守ってほしいよね。でも、最近はハンターとしてみんなの畑を守りたいっていうより、可能な限り自分で畑を守りたいって感じなんだよね。

俺は、最近は趣味で釣りなんかすんだけど、ブラックバスみたいなのいるじゃん。山だと最近はアライグマ。ああいった外来種ってなぜか繁殖力が強いんだよ。飼って飼いきれなくなって自然に返しちゃう。そういう人がいるから生態系がおかしくなる。やっぱりもう少し命の責任っていうものを考えないとダメなんかもしれないね。

最近の辛いことは、やっぱり獲ってきたものを家族が食べてくれないことかな。

Profile

島田正治 (しまだまさはる)

生年月日: 昭和21年11月16日

職業: ハンター。農業。

職業歴: 介護やハンターなど様々な仕事を経験し今に至る。

最初は遊びたい気持ちで始めたハンターだが、今では地区の代表者として立派に務めている。最近の趣味はマス釣り。

下里に生きる

戦争を経験した教師

話し手 島田六平

聞き手 野原啓吾 畠田虎太郎

(埼玉県立松山高等学校2年、1年)

みんな苦しい時だったね

空襲で昭和20年5月25日夜から26日未明にかけて今の新宿で家が焼けたわけ。それで家族そろって疎開してここへ来たわけ。疎開と言うのは、縁故疎開と集団疎開とに二つに分かれるん。学校ごとに集団疎開で、僕らの学校の子は群馬の方行ったらしいけど、僕は母方の実家がこの小川町の八和田ってとこにあったから、そこに一人で疎開してきたん。東上線乗ってきたわけよ。当時はね、電車が混んでてね、「買い出し電車」つったんだ。食料がないから田舎へみんな東京の人が食料を買いに来るんだ。そういう人たちが乗ってたから「買い出し電車」つった。

その後、みんな家族が焼け出されて、向こうに住むところがなくなったから、こっちに引っ越してきてね。んで、こっち来たってね、家があるわけじゃないからよ。そのうち、ちょうど一部屋あいている家があったんで、そこを借りてひとまず家族がみな入った。ところがそこへ住んでた人が兵隊から帰ってきたんで、また違うところに引っ越してっていろいろなとこでね。みんな苦しい時だったね。

ここに来た時はね、僕は小さいころの遊びなんて知らないん。こっちの遊びはね、だから魚釣りだけは好きでよくやった。川が流れてるから。たくさん釣れたからね。それは遊びじゃないんだよ、みんなね。それはもう、食料だよ。食べるために魚を釣ってきた。みんなこの辺の子供はきつとそうじゃないの。僕の家だってお米はみんな配給だから食べるものがないんだ。焼け出されてきたってことは何も道具がないんだよ。何にもないとこで、あるのはもってきた蓋のなくなったやかんだけなんだ。だからここへ引っ越してきておふくろの兄弟なんかがかまどをもってきてくれたり、釜をもってきてくれたり、米を少し持ってきてくれたり、そんなようなもんだったよ。けど、ほんとにご飯炊くんじゃないん。大きな釜にね、水がいっぱいあって、そん中に少し米があって。そのおかげの中にもね、なにもないときは野草を摘んでくるんだ。食べられるやつを摘んできてその中に入れたりした。大根の葉っぱを干したのを馬にくれるのがあるんだけど、その葉っぱをもらって食べたり。本当に戦争の被害を受けた人ってのはね、苦しい生活をしてきたよ。農村にいたから食べるものがあるだろうって思ったって無いんだよ、まったくないん。その頃、短麺という3cmくらいのうどんの配給があったり、燃料だって配

給だった。

たまたま僕が生まれたころ、昭和9年ごろ。この、今住んでるところ畑と田んぼを少し買っといたんだな。それで畑を返してもらってここへ掘立小屋を造ったんだな。そんなときは嬉しかったねえ。どんな小さな家でも、六畳一間の小さな家だったけど、自分の家がようやくできた。

この地域の人たちは素晴らしい

ここではね、分校のすぐそばに有機農業やってる金子さんって人がいるの。もう40年もやっているのかな。で、15、6年前からその有機農業に倣って勉強してこうって空気がこの集落に出てきてね。有機農業っていうのは要するに化学農薬を使わない。無農薬なんだ。化学肥料も非常に少なく作ってるわけね。普通田んぼには除草剤撒くのよ。稲は枯れないけどね、草は枯れるように。そういう除草剤も撒かないから、みんな草退治の為に苦労してるけどね。でもおかげで田んぼに住む水中動物なんかもだんだん増えてきた。自分達の水田をよくするためにその水田で無農薬で作ろうって。ある時はひえがいっぱい生えちゃったりして大変だった時もある。ひえを生やさないためにはどうすればいいかって勉強会を開いたりしてみんな努力してるね。この地域の集落はとても小さな集落だけど、僕は傍から見ていて本当に素晴らしい人たちだなんて思ってる。

僕は野菜を作ってるだけでね。ちょうど敷地の半分が屋敷で半分向こうは畑だから自分ちで食べるだけの野菜を作ってるの。売ったりは僕の所はしてない。んでこの地域ね、みんなが努力して有機農業にしたり、その努力が環境を良くしたりして、それで3年前か4年前になるかな、天皇杯ってのをもらったんだ。全国で「豊かなむらづくり部門」ってのですね。それで草刈りの応援ってのでも刈援隊って組織を作ってくれて、それで地域をきれいにしようとしてくれています。

今若い人がどれくらいいるってのは分からないけども、農業を継いでくって人がどれくらいいるかが心配だね。よそからきて有機農業をやりたいっていうんでね、田んぼを借りてやっている人もいます。



有機農業を最初に始め霜里農園を営んでいる金子美登さん

教師時代

小学校の先生になったのは昭和33年頃だね。なりたいと思ったからなったんだ。

一番最初だね、秩父郡の大滝村ってのがあつた。大滝村にはね、5つの分校があつた。中津川分校ってとこに最初へ行つた。そこに3年間いたね。本校から中津川分校までは16キロもある。分校ってのはその地域に住んでる人の学校だね。で、その後は大川小学校ってのがあつたんだけど、そこへ10年ぶりいてそれから金勝山に少年自然の家ってのがあつたんだけど、今は元気プラザってなつてる。あれを作るときに出て4年間いたかな。プラネタリウムを大体やつた。そこから都幾川の奥の方の小学校へ行つてそこに3、4年いた後、文部省の国立女性婦人会館に出た。そこが終つてから今度は坂戸の中学へ行つて、また比企の方へ帰つてから3年間ブラジルへ、今度は3年間、マラウスってところへ行つた。マラウスに日本人学校があるから行つたんだ。

ブラジルでの暮らしはそりゃ日本とはいろいろ違うからな。でも文化ってのは異なつてはいるけど、それぞれを尊重すればいい。言葉の不自由はあるけども、大体アパートから学校行けば日本語だし、大体買い物ってのはスーパー行けば話なくても買い物できるからそう困つたことはあつたね。

最後はまた小川へきて終つたけど。勤めは、中学の校長したり、小学校の校長したり色々だつたけど。

退職後小川町の教育相談室ってのがあつて、色々不登校の子供やそれからさまざまな問題を抱えた子供たちの相談相手として、親や子供の相談室で4年間くらいしてた。

やっぱり寂しいねえ

この地域にも分校があつたんだよ。下里分校ってのがあつた。ちょうど僕が区長をしているときに廃校という問題が起つた。分校へ行く子供が7人くらいい

たんだよ。だけでも7人やそこの何人かで学校生活を送ることにね、親が不安を感じた訳だね。ここに住んでればね、この分校へ行かなくてはならないっていう規則があるんだよ。だから親が子どもを別な家へ移住させちゃうわけ。実際はここへ住んでいる訳だけど、住民票だけ移しちゃうわけ。子供をみんな本校へやっちゃうと、上がる子供誰もいなかった。それでそんな時ちょうど僕がこの地区の区長やつて、区長さんの集まりのときに、それじゃどうしようかってことで全部アンケートを取つた。そしたら8割5分が、誰も行き手かまらんじゃ、もう分校をなくしてもいいという回答があつた。で「分校をなくしてもいいと、本校へ行きたがっている」という署名運動をして、教育委員会にそれを届けた。だけどやっぱり寂しいねえ。分校がなくなるってことは要するに地域から学校が一つ消えるわけじゃない。学校がなくなるとだんだん戸数が減ってくる感じがする訳だね。で、分校は最初林校として、3年か4年後には廃校になつて、今は建物だけ残つてる。この地域どつて小学生が一人か二人かな。本当になくなつちやつて。みんなでどうにか限界集落にならないように努力している。そんな感じですね。

(取材日 平成26年7月30日)

プロフィール

島田六平 (しまだろっぺい)

昭和9年1月16日生まれ 80歳

東京都中野区向台町で生まれる。小学校5年生の時第二次世界大戦の空襲を受け、家が焼け、昭和20年5月25日夜から26日未明にかけて小川町八和田に疎開をする。その後昭和33年頃に小学校教諭になる。退職後は小川町教育相談室で働く。現在は家庭菜園を行っている。

取材を終えての感想

下里地区の人が地域の為に皆一生懸命頑張っていることを知り、自分も少くくは地域に貢献できるよう努力しなくてはならないと思いました。自分達から無農薬で農業をしようという姿勢に尊敬しました。戦争時代の事は歴史で知っていたと思つていましたが、想像と全然違つた現実に驚きました。自分たちはとても恵まれた生活をしていると思つました。

外国での生活はそこまで不自由しない事は意外でした。

下里地区も若者が少なくなつて過疎化も危ぶまれているのでこれから自分たちのような若者がどうにかしていかなければいけないと思つました。初めてのインタビューで緊張しましたがとても良い経験になりました。この経験をこれからも活かしたいと思つました。

古き農業を学ぶ

—農家の苦悩とうれしさ—

話し手：西原 勇

聞き手：大納 英樹（埼玉県立松山高等学校 1年）

収穫する時がうれしいんだ

農業は小学校上がったあたりからさせられたよ。うちは百姓ですからね、麦とかを作るのを手伝ったんだよ。肥料は合成肥料っていう窒素とリン酸とカリ(カリウム)を買ってきて家で混ぜたものを使ったり、干した魚を挽いた魚粉とか牛ふん、大豆なんかの自然肥料とを両方使って育てたね。で、その肥料をまく畑は馬と鋤でもって耕すんだ。馬は力のある道産子ってのを飼ってて、当時は確かどの家庭も馬や牛を飼ってたと思うな。で、その馬も一定の年数で取り替えるんだけどまだ働けるうちに替えるんだよ。何でかっていうと馬を買ってくれる闇業者ってのがいて、若くて働けるうちだと高い値で買い取ってくれるんだ。でその馬はまた別のところで売って金にするんだと悪いこと考えるやつもいるもんだ。で、鋤って道具も使うんだけど、まんのうって道具で耕すこともあるんだけどそれより楽なんですよ。でも農業は大変なことには変わりないです。天候に左右されやすいから雨なんて降ると畑には入れないから仕事にならないし、二毛作っていった米を収穫した後すぐに麦を植えて育てるから年中無休なんだよ。でもその大変なのを通り越せば収穫ができますから、私は収穫する時が農業やって一番うれしいんですよ。でも今はもう農業やってなくてね。そうだな昭和40年ごろに辞めちゃったよ。今は趣味の範囲でやって白菜植えたり、苗作ったり、まあ所得がないから農業って言えないけどね。

蚕も収入源だったんだよ

蚕も農業同様に仕事で収入源でもあってね。まあ最初は小学生くらいのころから親の手伝いでやり始めたんだけどね。年三回蚕を育てるんだよ。蚕は卵からかえって1カ月で育つ卵は業者から買ってきて孵化させるんだ。蚕は桑の葉を食べさせて育てるんだけど、その桑の葉っぱをとるために桑の木も植えるんだよ。桑の木は1年ごとに植え替えるんだけどね。で、ある程度育ったらまぶして言う四角い枠がたくさんある道具に繭を作らせるんだよ。だいたい4日ぐらいで繭がかんせいするんだ。で、できた繭は枠から取って糸を紡ぐんだけどその時にじゃぐり（西原さんはじゃぐりとおっしゃっていたが地方に

より異なり座繰：ざぐりとも言う）っていう道具を使うんだよ。それでぐるぐる、ぐるぐる巻くんだよ。繭1つじゃ糸が弱いから4つぐらいまとめて紡ぐんだけど、繭を紡ぐのは女性の仕事だったから、あんまりやったことないな。でも触ったことぐらいはあるんだけど、絹だからって言って最初っから手触りいいわけじゃないんだ。最初はごわごわしてるんだよ。でも糸を自分ちで紡いでたのも最初の頃でね。そのあとは繭のまんま業者に売っちゃうんだ。



写真の座繰は別の地域のものです

PROFILE

西原勇 にしはら いきむ
大正15年1月10日 88歳

幼少の頃より野山で遊び育つ。昔は農業をやっていたが現在はやっていない。趣味で農業をやっている。幼少のころは松山まで歩いて遊びに行ったりカタクリの実を焼いて食べる位ずらをするなどやんちゃな面もあった。戦時中は徴兵されるも終戦と時期がかぶり訓練に行つて2ヶ月で無事帰宅する珍しいエピソードも持っている。東京のほうでガス関連の仕事や准公務員の職歴を持っている。

●取材を終えての感想●

今回のこの企画に参加しているいろんなことを学ばせていただけたと思います。自分の家庭でも農業をやっているのですが地域が少し変わると同じ作物を作るにも全くちがうやり方をとっていたり、今まで本や学校で浅はかな知識しか教わったことのないような蚕の作り方や育て方育てる時期などこと細かく教わったり、とても勉強になりました。また普段の生活の中ではなかなか話さない長い人生の経験を持った方とじっくりとお話しできたことは自分にとってとても良い経験になりました。また今回教えていただいたいろいろな知識を様々なことに生かしていこうかと思えます今回はこのような素晴らしい企画に参加できてとてもうれしいと思います。またこのような企画があったら積極的に参加していきたいと思えます。

人生の大先輩

～人生の後輩に伝いたいこと～

話し手 福島伊三郎

聞き手 松澤 圭悟

斉藤 翔

(埼玉県立松山高等学校映像制作部一年・三年)

3 回死を味わった中国遠征

私は町立の青年学校に行ってたんだけどね、軍隊から退役してきたえらい人が指導で週二回戦闘訓練なんかをして、鉄砲かついでオイッチ二一、オイッチ二一やってたんだよね。だから兵隊さんのまねというか準備をしてたんだよ。夜は冬場11、12、1、2、3月の5ヶ月ぐらい。農業の勉強をしたり、国語や数学なんかもやってたんだよ。それを5年通った。

そのあとね4年と7カ月中国遠征に行ったんだよ。そこで三回死にかけたんだよ。

1回目は敵から逃げてる時にね、敵の弾がももに当たってね、両もも貫通して出血多量になったんだ。その時に私は重さ4キロの機関銃を持って、精一杯逃げて、やっとの思いで治療所で治療してもらって一命を取り留めたんだよ。

2回目は手榴弾合戦やってね、一晩中ドンカンやって、兵隊が全滅して死人者がトラック2台分にもなったんだよ。

3回目はね自分がとばされるはずの中野中尉隊が戦争で全滅してね、あの部隊にとばされてたらって今考えたら、行かなくてよかったって言ったらひどいけど、奇跡としかいいようがないよね。

長生きの裏の苦悩

長生きの秘訣って言われても、まあ適当だ。まあ仕事やったり、今はもう腰がダメになったから農家のことは全然できないねえ。食事の方はねえ、やっぱり塩分とかをあまり取り過ぎないようにねしてるんだけどねえ。若い時から甘いものが好きで終戦後はお菓子が無くて、まだ精製してないドロドロのやつを、やたら舐めたりご飯の上に乗せたりして食べてたら胃を悪くしちゃって、20代で胃潰瘍になっちゃった。それから日赤でいくらか入院して、それで退院してから肘悪くしてねえ。甘いもので壊したものは治らないって昔聞いたんだけど、確かにそうだね。未だに胃の薬は止められないの。50年も60年も飲み続ける。

心臓もこれは間違ったと思うんだけど、夕方になんか鳩尾(みぞおち)が痛くなってね。だけどこれは自分では胃が関係してるのかと思ったんだけどね、せがれが「これは心筋梗塞かもしれねえ」って、すぐ江南の病院に連れてってもらって診てもらったらね、確かに心臓から出てる3本の管の一本が細くなっちゃってねえ。自分はしたくなかったんだけど「これは手術しなきゃ」って言われてしたんだよ。それから血の固まらない流れを良くする薬をもう10何年か飲んでるんだ。

それと18年ぐらい前に毛呂の病院で、十二指腸の真ん中にしこりができてるってあってね、これを調べてたら、恐らくガンだろうから手術するっていうんでね。私は内臓を全部取るんじゃないかと思ってね。あんどき75・6歳だったかな。「手術は成功しても、恐らくは外に出られるようにならないだんべ？」と言ったんだ。寝たり起きたりで3年も持てばいいと思ってねえ。この歳になったからいつ死んでもいいから「手術はしません」って言って帰ってきたんだ。それが正解だった。あんどき手術してたら、3年もたたずに死んでる。それをしなかったから93

歳まで生きてられるんだらうね。まあ後は、生まれながらのこういう体質なんじゃないのかなあって。とっても命が強いだらうね。

3 下里への思い

下里に住むには非常に良いと思ってますよ。ただ交通の便が悪いのがねえ。だから今93歳だけど、車は自分で運転して町へお使いやなに行っていて、自分のことは自分でやってるんだよねえ。

4 今を生きる高校生へ

まあ、日本の国も今まで以上に大変だと思うんだよね。経済的にも、外交的にも大変だと思うんで、なかなか働かって言っても上手くいくもんじゃないし。それから保健関係だってね、どんくらい苦勞するか分からないからね。本当にこれからの時代は、大変だと思ってるよ。本当に、がんばってほしいね。

5 自己紹介

大正10年4月3日生まれ・満93歳3か月・5人兄弟の長男
小川で生まれ今まで、20種類以上の仕事をやってきている。
～今までやってきた仕事～

4歳～6歳 学校に行けず子供の面倒を見る。

13歳～16歳 農家の手伝い

16歳～20歳 田んぼで二毛作、土形(今の土建業)

春 田んぼの準備

夏 お蚕、百姓

秋 石灰岩を採る

冬 薪の販売、材木出し

20歳～ 兵隊になる、炭焼き

45歳～ 東電の電気メーター調べ

48歳～50歳 工場長を2年間

50歳～55歳 歴史資料館の警備員

55歳～60歳 土建会社社長の運転手

65歳～70歳 土地買収 など20種類以上

6 感想

今回、初めてこういう形で福島さんにインタビューをさせてもらい昔の戦争の恐ろしさや長いきの秘訣などを聞いて良かったです。特に戦争の恐ろしさは戦争を全く知らないこどもたちに伝えていけたらなあと思いました。

昔と今の違い～変わりゆく農業の形～

話し手 福嶋 嵩

聞き手 松本 和樹 松山高校映像制作部 2年

穂積 隼斗 松山高校映像制作部 1年

0. 自己紹介

名前は福嶋 嵩。生まれ育ったのは埼玉県小川町下里地区です。

下里は、有機農業が盛んで金子 美登さんの霜里農場が有名だね、ここはブランドにもなっているんだよ。

1. 昔の仕事

昔やってた仕事は蚕だよ。1年に春、夏、秋の3回繭をとる。桑の木を餌にして育てる。桑の木は剪定（手入れ）をする必要があるんだよ。それを市場に持っていったらいい。春が一番取れて50貫（約200kg）ぐらいね。夏と秋は春の半分ぐらいだから、1年で100貫（約400kg）取れる。あとは、自家用の米と麦をとってたぐらい。馬に犁を引かせたり、雑草を抜いたり、機械がないからほとんど手でやってたんだ。だから1年中何か仕事してたんだよ。それに、作物によって時期が違うから、できるだけ組み合わせでやってたんだよ。収穫の時期には、みんな興味を持つように豊年万作ちゅう歌舞伎をくずした感じの踊りをして歩いてたね。あと、冬場に山仕事をしてた。ノコギリを使って杉の木を切ったり、落葉樹を切って炭焼きにしたり、薪を売ったりしてたね。石の採掘はごく少数の人だったね。



↑ 犁 図：長野県上田市塩川町 2874-1 松山記念館 HP 引用

※引用のため下里で使われているものとは異なる場合があります。

2. 現在の仕事

今は桑の木がないから蚕はやってないんだよ。今は畑や田んぼをやっているけど、ほとんど機械になってきたから家中でしている仕事はほとんどないよね。米は安心して食べられるように完全無農薬。稲は自分で育つ力を持っているので、よっぽどの病気じゃなければ虫に食われることも大丈夫。過保護にしないことだね。この地区の米は無農薬ってことでブランドにもなっているんだよ。肥料も農協とかで売ってるものは使っていないんだ。

畑ではネギ、トマト、キュウリ、ジャガイモをつくっているね。どれも自家消費だから、産業として成り立つものはない。雑草が生えてくるので少しずつ場所を変えて作ってる。最近では杉ヤヒノキが増えて生活圏が狭くなったからだろうね、夜にシカやイノシシが出て、畑を荒らされるんだよ。鉄製のワイヤーをひっかける足くり農程度の対策しかとっていないんだよ。

Profile

福嶋 嵩 ふくしま たかし 昭和5年2月27日生・84歳・農業

畑や田んぼをやっているけど、全部自家消費だから産業として成り立っているものはないね。子供のときは竹を使った兵隊ごっこをしたり、今は禁止になっているけど川に行くと水遊びをしていた。戦時中には暴れみこしてのがあってね日を決めてやってたね。

取材を終えての感想

私は、この取材を通じ、2つのことを感じました。

1つ目は下里地区の良さです。私が感じたこの地区の良さは、なんとも自然です。私の地元ではこんなに川が綺麗で辺りは田畑や山があるような環境にないのでこういった環境に新鮮味を感じました。また、農業が盛んで下里地区で作られる米がブランドになっていること、霜里農場という、全国で有名な農場があるということには驚きでした。2つ目は、今との違いです。私は祖父の畑仕事の手伝いをするのですが、土を耕したり、手入れをしたりと小規模ながらとても苦労しています。しかし、今回お話を聞いて改めて昔の畑仕事や田んぼの大変さを感じ、機械が使える便利さを感じました。

以上のことより私はこの取材を通じて新たなことを知ることができ、良い経験になりました。